7. ふしぎな夏休み

各務原市立陵南小学校６年
牛田　凛花　　新井　航太　　高田　香歩
↓
敦賀市立粟野小学校６年
宮﨑　佳奈

今日は終業式だ。
明日からは、楽しみな夏休み。
夏休みには、家族でキャンプに行ったり、友達とあそんだりする楽しいことばかり。
「おーい、祐典ーー。通知表くばられるぞーー！」
ぼくは一番の友達の和也に呼ばれた。
和也とは、夏休みにいっぱい遊ぶ約束をしている。
確か、今日は二十一日だから……、明後日の二十三日に和也ん家にとまりに行く。楽しみだ。
こんな事を考えていたら、ぼくの手に通知表がくばられた。
「あー、めちゃめちゃきん張する～！」
和也と話しながら通知表に目を通した。
「うわっ」さいていだ。
◎が一つも無くて、○は二つ、△が十八個、×が四つ。×なんて、みんなにとっては、とてもめずらしい。だけど、ぼくにとっては、三つや四つぐらいあたりまえだ。
和也も成績は悪い方だけど、ぼくにしてみればうらやましい。
だって、和也は◎が四つ、○が九つ、△が十個、×が一つ。
どう考えても和也の方が、成績がいい。和也は、運動しんけいバツグンだけど、他はぼくと同じくらい勉強が苦手だ。
またまたそんな事を考えていたら、和也にはなしかけられた。
「なぁーー、祐典ーー、いっしょに帰ろうぜ」
「あぁ、いいよ、あっ、ちょっと待ってて」
ぼくはそう言うと、担任の先生のところへもらい忘れた夏休みの宿題をもらいに行った。
「なんじゃこりゃ～～！」
中をペラペラめくって見ると、おそろしいほど分からない問題ばかりだ。
まぁぼくはやる気がない。めんどくさいというか何というか。
「おい、祐典、おせーーよ」
和也は、待ちくたびれたのか、ぼくの所へ来た。
「あっ、和也！　わりぃな」
二人はこんな会話をしながら、夏休み中行くことのない学校をはなれ、帰って行った。

―　二十三日　―

ぼくは、和也と近くのコンビニで待ち合わせをした。
五分後、和也は来た。
「さぁ行くか」
二人は声をそろえて言った。
和也ん家に着き、目の前の光景を見て、二人はかたまってしまった。
「なぁ、和也ん家の横にこんな店あったっけ？」
「俺がコンビニへ行くときは確かになかった」
とりあえず、和也ん家に入る事にした。
（あれ？　だれもいない）
「お母さーん、お父さーん、あゆみー」
あゆみは和也の妹だ。
てゆうか、だれもいない。
ぼくと和也は何があったか、よく分からないまま、となりの店にたずねてみた。
「あのー、すいません。ぼくの家族がいないんですけど、見てませんか」
と言って、のれんを開けてみると、気味が悪い店だった。
誰もいないのが、また気味が悪いのだ。
ぼくは外へ出た。
「すいませーん。誰かいませんか？」
前を向いたしゅんかん、ぼくの目にあるかんばんが目に映った。

『あなたの望み叶えます』

……あれ？　そのとなりに書いてある字がにじんでいて読めない。
かんばんの所には、小さなまねきねこがおいてあった。
何か不気味だ。とりあえず、外にも誰もいなかったので中に入った。
「なぁー和也、誰もいね……」
和也がいない。まあどうせどこかにかくれているのだろう。
「どこにかくれているんだ！　出て来いよ」
しかし、どこを探しても和也はいない。
どうなっているんだ、この世界は。次はぼくが消えていくのか？　そんなのイヤだ。
ぼくは、こわくなって店を飛び出した。
「……」
ぼくは声を失った。
ぼくの視界に飛びこんできたのは、見た事のない世界。
ぼくはもう家族に会う事はないのか。もう友達には会えないのか。
「あっ」
ぼくは、あのかんばんを思い出した。

『あなたの望み叶えます』

　もしかして、これにお願いすれば元の世界にもどれるかもしれない。ぼくは、ばかばかしくなってきた。
「叶うハズないか……」
　ぼくは涙が出て来た。
　その涙はさっきのまねきねこの手に落ちた。そのしゅんかん、辺りがまぶしくなった。
「ワァァァァーー」

　目を開けたら、暗いトンネルにぼくはねていた。
　むこうから小さな足音がテクテクと聞こえる。
　ぼくは、小きざみにふるえた。こわくてしょうがなかった。そして、そのしょうたいが見えた。小さな白いねこだ。
「何だ、ねこか。うわっ、かわいいーー」
「そんなにさわらないで！」
「うっ、うわぁー、ねこがしゃべった～！」
「もぉー、うるさいなーー。大きい声出さないでよ！　それよりあんたのまわりの人、どこにいったか知りたくない？」
「お前、知ってるのか？」
「ええ、だってあんた達が入って来た店のまねきねこですもの。てゆうか、お前って何よ、お前って！　私はジュ・リ・ア！」
「はい、ジュリアさん。教えてください」
「いいわよ」
　この会話からぼくの不思議な体験が始まるのだ。☆

　ぼくは、暗いトンネルの中を、あのジュリアとかいう猫と歩き続けた。
「なんで、和也ん家の横に店なんか出すんだよ。で、みんなの居場所は？　何でいなくなったんだよ」
　聞いてみると、こういう返事が返ってきた。
「店出した理由は、看板に書いてあったとおり、だれかの望みをかなえたかったから。そして、たまたま、和也の家の横に店出して消したのよ！　で、祐典の望みをかなえてるの」
「け、消したって、ジュリアが？　何で」
「えっ、ただ祐典に不思議な体験をさせてやりたかったのよ！　だから、みんなを森に消したの！」
　やっとわかった。それなら、早くぼくの望みをかなえてよ！　言葉に出して言った。
「早く望みをかなえてよ！」
「わかってるってー。今からやるから！」
　と、ジュリアがいった。

　しばらくして、祐典とジュリアは暗いトンネルを出た。
　そこは、広い草原だった。

　ふと、後ろを見ると、ジュリアが何かを探している。
「何探してんの？」
「一つの水晶。それを手に入れれば、祐典たちが元の世界に戻れるの」
「うっそー。あっ、でもどこにあるの？」
「それを今から探しに行くの！　はい出発！」
　そう言うと、すたすたと歩き出した。祐典も後についた。
　祐典たちは、歩いているうちに森に入った。あたりを見回しても水晶らしきものは落ちていない。
「なー、本当にあるのかよ」
「たぶんね」
　そのとき、ジュリアは重要なことを思い出した。
「この森に池があって、池に太陽が映ったら……」
「えっ、でも今、曇りだって！」
「人の話を最後まで聞けっ！」
「……はいっ」
「で、水晶を太陽が映っている部分に投げるの！　でも、晴れる前に見つけないとね」
　と、心配そうに言った。
「それなら早く！　太陽が出た瞬間に投げるってことやろ？　早く和也たちを見つけようって」
「わかったって！」
　そうとなれば、早く見つけないと！
　ジュリアと祐典は、手分けをして探した。
　どちらとも、まだ見つかっていない。と、そのとき！
「あれ？　祐典？　何でここに？」
　どこかで聞いたことのある声……、和也だ！　祐典は和也のところに走って行った。
「和也！　無事でよかったな！　本当にゴメンな！」
「えっ、何で祐典がオレにあやまるんだよ」
「あっ。実を言うと……」
　祐典は和也に事情を話した。
「わかった。水晶と池と父さんや母さん、あゆみを探せばいいんだろ？」
「そういうこと！　探そう」
　二人は水晶を探した。やっぱりない！　何で？
　すると、祐典が落とし穴にはまった。
　　ドサッ
「うわっ、痛いっ！　何でこんなところに……」
　祐典が立ち上がろうとしたそのとき！　手に何かが乗っている。
「何だこれ？　あっ、水晶！」
「うそー！　あったのかよ！」
　見ると、本当に水晶だ。透明で丸い。
　二人は見とれていた。そこへジュリアが来た。

「あったー！　やっと！　落とし穴にはまってありがとうね～！」
「それはどうも。それより池は？　和也の家族は？」
「まだ！　急ごう！」
　みんなで池を探した。
　探しているうちに、がけのところまで来た。
　辺りを見回すと、森や草原が見える。けっこう見晴らしがいい。
「ここから見れば、池が……、あっ、あったー！」
「えっ、どこ？」
　ジュリアが指した方向を見ると、小さい池があった。
「ねぇ、あったのはよかったけど、ここを下りて池のところまで行くの？」
　和也はジュリアに聞いた。
「面倒だし、ここから投げよう！　祐典がやって」
　急に言われた祐典は、仕方なく引き受けた。でも、和也の家族は見つかっていない。和也はちょっと落ちこむ。
　そのとき、和也の家族が来た。
「あっ、父さん、母さん！　あゆみ！」
　見つかった三人は無事だ。
　三人は不思議そうに、目の前の光景を見ている。
　そして、雲がさけ、太陽が！
　祐典は水晶を投げた。幸い太陽が映っている部分に当たった。
　と、その瞬間、映っているところが光り、まぶしい！
「わぁぁぁ！」

　気がつくと、五人は和也の家の中にいた。
　しばらく静まっていた。
　ふと、我に返った祐典は、ジュリアを探した。
　しかし、店もジュリアも見つからない。
　こうして、不思議な冒険は終わった。
　一生忘れられない体験だった。